

カンナの葉を表紙の下地にしました。この夏にたくさんの大きなオレンジ色の花をつけて体力を消耗しましたが、今はたっぷりと日光を浴びて、地中の球根を育てています。ここに「生き抜く」心意気と営みを感じます。

死んでたまるか！

NHKの番組を隣で見っていた私の娘が、今のアナウンサーは「二十世紀」をちゃんと発音していたと言いました。娘は小学校時に先生から、正しくは「ニジツセイキ」と読むと教えていたそうです。初めて知り得たその時、私の老齢化しつつある細胞が、瞬間的に活性化した感覚を得た喜び、それはまさに『小さな秋を見つけた』ような新鮮な感動でした。

早速NHKに確認したところ、「二十世紀」の読みは「ニジ(ユ)ツセイキ」。「二十個」は、「ニジ(ユ)ツコ」と読む。また、(一)で囲った小さい「ユ」に関しては、NHKでは「(一)内の語は場合により発音してもよい」という立場をとっていて、原則的には「ニジツセイキ」「ニジツコ」と読むが、どちらの発音も間違いではないとのことでした。私の好奇心は一応の結論を見て、話のネタを得ることができました。

ところで「終活」という言葉をご存知でしょうか？「エンディングノート」というとピンと来るかと思えます。誰にも等しく起こる人生の終焉を考えることを通じて、自分を見つめ、今をよりよく、自分らしく生きる活動のことをいいます。私はこの「終活」に触れるたびに、「死んでたまるか」という語句を思い浮かべます。どんな些細なことにも感動するように好奇心を発揮し、元気な細胞を活性化させて、皆が幸せで長生きができれば何よりです。

今年のノーベル生理学・医学賞に本庶佑・京都大学特別教授が受賞されました。気の遠くなるような長い研究を続けてきた教授をずっと支えてきた原動力は「好奇心」だったそうです。この度の受賞に併せて、絶え間ない好奇心が大きな結果を生むという極めて見事なお手本をお示しくございました。

(株)溝口祭典 溝口勝巳